
勝太郎くん

キザクラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勝太郎くん

【Nコード】

N4177C

【作者名】

キザクラ

【あらすじ】

主人公「勝太郎」。恋愛をつい最近まで「れいあい」と読むと思っていた。恋愛感情が薄い勝太郎の話と周りに起きる出来事の話。次話の予定、不定期更新。予告なく本文修正あり

序章

雲が多く漂う空にうつすらと照らす太陽の光。ゆっくり、妙にやさしさが感じる風が木々の葉を揺らし、今日も早朝から不機嫌に眠気いっぱいな勝太郎の髪をなびかせる。

頭が・・・頭が鈍い。いや、鉛が入ったかのような重く変な感じにさせる。

1週間に1度のペースで眠れない夜がくる勝太郎。今日もその眠れない夜をすごし、とうとう朝を迎えてしまい窓を開けながら片手で頭をかき、このどうしようもないダルさから少しでも和らげようと外の空気を、いっぱい吸う。

眠い 眠い 眠い。

学校か、と呟きながら服を着る。

この眠気から少しでも解放させようとシャワーでも浴びようと上着を着た時に、ふと思った。

一度きた服を脱ぎながら風呂場へと移動する。

シャワーが終わり少しは目が覚めた。たまにする朝シャワーは良いと思う。

突然「眠い」と大きな声で独り言を言う。時々勝太郎は無意識に独り言を言う。

いや、無意識だろうか。思ったことを声にだしてしまうのだ。たまに思っていないことまでも口にしてしまう。ようするに彼は自然なところがあるのだ。

彼にしてみれば痛い性格だと思っている。

本当に独り言が多いから。冷静になって我に戻ると恥ずかしさが一気に襲うと同時にむなしさと馬鹿馬鹿しさを覚える。

やはり眠い。

きついな。今日はバイトもあるのか。死ぬぞ。

心の中で今日はキツイと思いながら学校に行く準備をする。

途中、学校に行くのを辞め、この眠気なら寝れると思う。

だが、今日の授業は4回も欠席してるから。これ以上の欠席はキツイ。

ため息をつきながらシヨルダーバッグに学校の教科書などを入れ支度を終える。

自分の部屋から出て、朝食をするため台所へと向かう。

途中、親の部屋を通り過ぎるとき横目で見て、母・父ともに口を、パカーッと大きく開けながら寝ている。自分の親ながら馬鹿づらしていると思う。

朝食を作るのがわずわしいので、テーブルの上に乗っているバナナを2本食べる。

次に冷蔵庫へと向かい2リットルの天然水のペットボトルをラッパ飲みする。

親からはコップに入れて飲めと言われるが、入れるのが面倒くさいのと、飲んだ後のコップの洗浄が後ろめたいというのか面倒くさい。体が欲するままに水を飲み終わると、ペットボトルをしまい。部屋へと移動しシヨルダーバックをとる。

最近買ったばかりのシューズを履き扉を開ける。

学校へ行く時間は、だいたい早くて1時間かかる。家から約10分歩いてから、我が町「田畑市」の玄関口である田畑駅へと入り、そこから8つの駅を超えて9目の駅「植田駅」が、我が大学である「光大学」の最寄駅である。

なんで「光」なんて名前つけたのだろうかと、たまに思う。自分なりの考えは多分、光のような勢いで輝かしい未来にむかって、みたいな感じだろうと解釈しているつもりだ。

この大学は、創立10年足らずの大学で、当然名門校ではないし、校内は狭い。もちろん4年制で学部は総合経済学部の経営経済学科と商学科、環境経済学科。そして、去年設立されたばかりの看護学部看護学科がある。

最近、どの大学もユニークな学部・学科などを設立して、この少

子化社会の中、独自性を出して学生争奪戦に生き残りをかけているのだらう。うちの大学も、そうして環境経済学科に続いて看護学部ができたのだ。まあいつ潰れてもおかしくないクソ大学だと勝太郎は思っている。ところで勝太郎は、経営経済学科で2回生だ。当然経済系の学科は女子が少ない。

だが彼女がいない勝太郎にしては男臭い大学に、女子限定の看護学部が出来たことはうれしかった。希望が持てた。しかしながら勝太郎は「恋」をしたことはない。

つい最近まで恋愛を「れいあい」と呼んでいた。パソコンの漢字変換で分かったのだ。

決して同性愛者ではない。異性に興味がないことはない。「かわいい」とか「キレイ」とか思う感情ある。ただ「恋」ができないのだ。好きになることができないのだ。なぜ自分がそうなのかは分らない。自分は男が好きなのかと、真剣に思ったことはある。

無理やり好きになろうとした時もあった。だが無理だった。そのため勝太郎は、友人や世間がいつている恋の話や恋愛番組・恋愛映画を見ても、なんら感銘や共感がもてない。

逆に、持ち前の独り言でつつ込んでしまう。ひねくれ者だからか。諦めたからか。自信がないからか。シャイだからか。女が苦手だからか。

まあ自分は見た目的に不細工な方だと思っている。だからだと自分なりに納得して19年間、彼女が出来ないのだと思っている。

さて、いつものように田畑駅から植田駅へと電車で行き、そこから歩いて5分くらい歩いて大学へと着く。

品のない大学の門を超えると、扉へと続く道が約10メートルくらいある。

そこから、各受ける授業の教室へと移動する。今日は1時間目から5時間目まで、ぎっしりとある。そして、学校が終わるとバイトなのだ。

寝ていない勝太郎にとって、今日のスケジュールは死を意味してい

る。

しかしながら学校を休むこともできず、よく戦争映画で聞く大和魂つてヤツだと思いつながら。気合で気合で乗り切ろうとしている。

そして、今日の昼休みに突然、勝太郎に思わぬ出来事が起きる。

藪から棒に

1時間目の授業が始める3分前に教室に到着した勝太郎。友人はまだ来ていないようだ。

1時間目の授業は「経営学」である。アメリカの自動車会社大手のフォードを視点にした産業の発展から成熟する過程をみる講義内容だった。

先生の目に届きにくい教室の隅へと移動してから椅子に座り、横にシヨルダーバックを置く。寝るために隅へと移動したのだ。そして、いつものように小さな声で独り言を言う。寝ていない勝太郎は変な感覚になっている。体が少し浮遊している感じだ。変な気分。だんだんと眠気によっていざなわれていく。授業の堅苦しい話が余計に夢世界へと導いていく。

麻薬をしているかのような気分だ。いや、麻薬はしたことがないので麻薬した気分は分らない。なんともいえない心地よさだ。机の上に両腕をクロスし、その上に頭を載せるだけの姿勢なのに。やっぱり寝ていないと、こうなると改めて思った。

そして、先生の授業終了の合図で起きた勝太郎は、出席用紙に名前と学籍番号を書き提出した後、机に戻り眠りの続きへと。2時間目の教室は1時間目に行われた所とおなじだ。その事を分かって睡眠の続きにはいったのだ。

そして、この二時間目の授業も同様、終了の合図とともに起きて出席用紙をだした。

起きた時に、隣に友人がいた。どうやら友人も寝ていたらしい。

「あれ？お前だけか？」と勝太郎が友人に話をかける。

「そうですね」と語尾をのびしながらしゃべる。

彼の名は「広本 駿」という。「駿」と、みなから言われている。

セミロングな髪で、160センチあるかないかの身長で幼い顔立ちなため、彼はよく深夜で外をぶらついていると警察に呼び止められ

ている。ちなみに勝太郎は170センチだ。駿は評しぬけたしゃべりかたが特徴で、しゃべり方もメールの文章も「だね〜」とか「だよ〜」とか、語尾を延ばす習性、癖がある。

たまにイラつく時がある。ワザとなのか癖なのか分らない。また彼に対して怒る気がおきない。特殊能力だ。人を怒らせないオーラをだしている。なんとも忌々しいオーラだ。危険だ。

2時間目が終わり、昼休みになったので友人の駿とともに教室から出て食堂へと移動した。

食堂はパンク状態になっている。去年の看護学部ができてから食堂は大盛況だ。いや、元々狭い食堂の上に一昨年の環境経済学科の創設から、学生人数に対して食堂のスペースが割りにあっていない。ただでさえ勝太郎は人ごみが嫌いなのに。

その上、ここの食堂は、まずい・値段が高い・量が少ないの3悪なのだ。

我が光大学に対する失望の1つの原因だ。

「人多いし、臭いって。臭いって。人間多いって。」と、相変わらず勝太郎は恒例の独り言を連発している。そして、友人が選んだカツ丼を自分も同じカツ丼にした。だが未だ眠気が勝太郎を襲う。

キツイぞ。

駿がなにやら話しかけている。だが、あまりの眠たさに何を言っているか分らない。いや、分かるうとしたくない。考えたくないのだ。適当に受け答えをしている内に、しだいに話しかけなくなった。

それは、突然な出来事だった。見知らない女性が自分に話かけてきた。

藪から棒にとはこう言うことなのか？勝太郎は1回無視してしまった。

自分より少し小さめな身長のようにTシャツをきて下はジーンズなラフな格好だった。

キレイではない。どちらかというところ可愛いほうだ。

「すみません。あの……」
きよろきよろしていた。

勝太郎は思った。もしかて告白かと。告白!?
そう、それは現実へと変わったのだ。
看護学部の恩恵だ。

どうやら彼女は看護学部生のようだ。
カバンの中の教科書が少し見えて分かった。
眠気がいつの間にか感じなくなっていた。いや、感じなくなったの
ではなく、自分も緊張し、あまりの高揚感が眠気を抑えていたのだ。
夢なのかも一瞬思った。寝ていないし、なにより信じられないか
らだ。

「いいですか？」と彼女は言う。
聞かれた勝太郎はあらためて、顔が赤くなる。

やはり、女性は苦手だと改めて、こんなところで思う。
とりあえず。彼女もいなく。付き合ったこともないモテない勝太郎
に拒否権はない。

いや、次はないかもしれない。

「うん」と小さい声と同時に頭を縦にふる。

その後、1分間の沈黙がおきる。

そして彼女は、また会いましょう的な感じで彼女と別れた。
昼休みの時間が終わる合図のチャイムらしき音となる。

圧迫

昼休みが終わり、食堂の中の人ごみは徐々に減ってゆく。

頭が白いというのだろうか？ 突如な出来事が自分におきたので信じられない。

告白されたのか？

自分に心の中で自問自答する。

信じられない、でも事実なんだと、自分に言われたのだと。

高揚感。血液が・・・血つ血の流れが速い。

心臓が圧迫される。

体が熱い。

恥ずかしさも出てきた。ましてや友人の前で告白されたので、なおさらだ。

隣にいる友人、駿の方に顔を向ける。少しずつ、駿は笑っていた。

そして、「良かったな」と一言言ってから「授業行こうぜ！」と言った。

昼休みが終わり、3時間目の授業の教室のところへ移動した。

教室に入る前に、駿に注意事項を言った。今回の出来事は他言無用だと。

あとあと、ややこしくなるし、なにより恥ずかしい。

いや、完全に付き合った訳ではない。もし、付き合えなかったら？

実はあれは、ドッキリかもしれない。話だけ一人歩きしてはならないのだ。

まだ心臓が……。おお、眠いせいかな？ そういえば、いつの間に眠気を忘れていた。

だめだ！ まだ緊張する。ましてや自分が告白したほうでもないのに！ こんな事で、こんなに緊張するなんて！ 情けないと思った。

心の中で、自分に話し合いをする。落ち着け、落ち着け、落ち着けと。

なにより信じられない。本当なのかと？

しかし、友人の駿は、知っている。

駿に聞いてみて、自分は、勝太郎は告白されたのかと聞いてみようかなと思った。

勝太郎の19年間の人生。

いや、やめておこう。

そうして考えるうちに、今日の学校は終わってしまった。

そして、学校が終わると次はバイトだ。

そういえば、今日は駿だけしか学校に来ていなかった。他の友人たちは休んだのか。

ありがたかった。

そして、勝太郎はバイト先へと行った。今日は忘れられない1日になるだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4177c/>

勝太郎くん

2010年10月12日06時40分発行